

川の声

山本修一

かわこえ
川の声

一九八九年一〇月一〇日 第一刷発行

著者 山本修一やまもとしゅういち

発行者 若菜正
発行所 株式会社 集英社

〒101-55 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

出版部 (〇三) 二三〇一六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1989 S.Yamamoto, Printed in Japan
ISBN4-08-772713-0 C0093

目次

川
の
声

5

寒
菊
に
自
転
車

151

青
梅^{あおうめ}
の
雨

197

装帧

山田勝誉

川
の
声

川 の 声

高木洋一は、苛立ちをふくれ上がらせた。

白線の仕切りをはみ出して駐車させているワゴン車。リア・ウィンドウに貼られた若葉マーク。

初心者だから大目に見ろと言うのか。

舌打ちしながら洋一は、ワゴン車ぎりぎりに古いマツダを駐めた。

いっそワゴン車の横腹をサイドミラーでこすってやればよかったか。ギーッと音を立てながら、ゆっくりと引っかいていく。

しかし、そんなことで苛立ちが収まるものではない。それは、洋一にもわかっている。

ここに居る。そのことが苛立ちなのだ。

黄色のナンバープレートが半数以上を占める国立舞島^{まいしま}病院の駐車場。その金網越しののっぺらぼうに白い病院。入口を入れば老人ばかりが目立つ待合室。父親が死んだ病院だというのに、ここがよいと入院している母親。

サイドブレーキを引き、エンジンを切ったあと、洋一は車から下りないでいた。

去年11月、洋一の父親は発病し、今年1月脾臓ガンで死んだ。61歳だった。その初七日を済ませて間もなく、今度は母親が倒れた。もともと心臓が弱かったが、心労と過労から心不全まで引き起こしていた。

危篤状態を続けた時期もあった。

父親の死、母親の重体。それらは、洋一を東京から引き離した。生まれ育った綾木へと引きずり戻した。洋一には、兄弟も姉妹もない。おまけに無職だった。東京に居続けるといふ我儘は、押し通せなかった。

洋一が東京に固執したのは、東京にいれば可能性を夢見ていられるからだ。あるいは、妄想を守っていられる。分^{ぶん}を知ること、身の程を知ること、そして諦めること——それを1日延ばしに延ばしていける。

田舎ではどうか。田舎は、まず、無職を許さない。無職は単なる社会不適応者だ。怠け者、ヤクザ、わけのわからない者。そして、身の程を知れと絶えず後ろ指をさされる者だ。

洋一は、その田舎に無職者として帰ってきた。2月に東京のアパートを引き払い、1カ月が過ぎていた。

オフホワイトのシビックが洋一の前をやけにゆっくりと通り過ぎた。駐車スペースを探しているらしい。海際の市営駐車場は、いつもガラガラなのに、この病院の駐車場は、駐められな

いことすらある。

出るんやったら早おせい。満車やぞ。シビックの4人が洋一を睨みつけていた。勝手に誤解してろ。

洋一は、わざとらしくシートを深く倒した。

それで洋一は、思い出した。

後ろのシートにスーパールの白いポリ袋がある。中には、大美濃の熟柿が2個入っている。

「これ、もお、最後になってしもたんやけど、お母ちゃんに食べてもろて」

洋一の家の向かいに住む坪井のおばさんから言付かってきたものだ。

坪井のおばさんは、洋一が綾木に帰ってきたことを知って、わが事のように喜んだ。

「これで安心や、なあ、洋ちゃん」

「はあ」としか洋一には言えなかった。

「ああ、良かった、良かった」

坪井さんは、1人で頷き、笑い続けた。金歯がピカピカ光っていた。

洋一は曖昧な会釈をして、尚も言いたそうな坪井さんと別れて、思った。

オレは、安心など少しも欲しくはない。安心が欲しいのは、世間じゃないか。個人のよおな顔をして坪井さんは話すが、実のところは、世間が許したことしか話さない。オレは、世間などと話したくない。

越年した熟柿は、薄皮一枚隔てて果肉がドロドロに溶けている。チューチューと音を立てて吸い、食べるというより飲まねばならない。両手も口の周りもその甘い果肉がベタベタにつく。その始末のわるさをわかっていて、食べろと言うのか。

そんな熟柿を洋一の母親は、好物でもないのに両手で受け取り、頭を下げて言うだろう。

「ありがたいことや。いっつも氣い遣^{きづ}でもろて。あんたからも、よお御礼言^ううといてな」

洋一は、腹立たしさがつのつてきた。

「なんでこんなとこに座つとらなあかんのや」

口を突いて出た独り言に洋一は、愕然とした。シートから起こしかけた身体が硬直した。

オレは、綾木弁で独り言を言ってしまった。オフクロと話しているときならともかく、1人でいるときすら綾木弁に染まっている。

これじゃ、この辺のヤツラとおんなじだ。

自分が何者でもないという徴候を見ることがほど洋一を不安にさせるものはない。

洋一は、憤然として車から出て、歩き出した。

て急行で約1時間40分。山陰線は、綾木から西に折れて福生を通り、城崎、鳥取、松江方面へと続く。

舞島市は、綾木市と接して、北東に広がり日本海に面している。綾木駅から山陰線と分かれて、JR舞島線となり、北東に上り、西舞島、東舞島へと至る。東舞島からはJR小浜線となり、日本海沿いに福井県の敦賀まで続く。

高木洋一は、東舞島の病院の前を流れる与留保川よるぼがわに沿って、海へと歩いた。

歩き出して間もなく、コートを車に忘れてきたことを悔いた。セーターだけでは寒かった。与留保川の幅は、約10メートル。両岸から川底までをそっくりコンクリートに包まれている。用水路みたいな川だ。

水深は、1メートルあるだろうか。川底には、薄茶色の泥が積もっている。空き缶やポリ袋が点々と沈んでいる。

イザとこの地方で呼ぶ魚がいくつも群れを作ってゆっくりと泳いでいる。緋鯉がリーダーとなっている群れもある。

洋一は、泳いでいる魚を見るのが好きだが、足は止まらなかった。

15分程歩き続けて、川口に着いた。

午前中はとどころにあった青空が、今はすっかり消えて、薄暗い雲におおわれている。雪になるかもしれない。

海は、空を映して鈍く広がっている。

風のかげんか。洋一には、潮の匂いも感じとれない。

足下のコンクリートの堤を小さな波がピタピタと叩いている。

洋一の左前方20メートル程先にもう1つ川口がある。与留保川と平行して流れる祖父谷川の川口で、そのきわに結婚式場が建っている。7、8階建てか。『シーサイドパレス』と名前は華やかだが、外壁は薄汚れている。

沖には、クレーンを載せた平たい船が1艘停まっている。フェリーボートの発着場を造る基礎工事のための船だ。

しかし、その船もなんの動きも見せない。

結婚式場には、誰も出入りしない。

洋一は、寒さに身震いして歩き出した。

活気があるのは、病院だけだ。

橋を渡り、今度は祖父谷川沿いに溯った。祖父谷川の右岸は石堤で、樹脂製の小さなボートが一行にずっともやっている。ところどころにボートへと下りる階段がある。

病院の近くまで引き返してきて、洋一は古い喫茶店を見つけて入った。

ここまで来る途中にも喫茶店はあった。しかし、それらは、明るさや若々しさを強調した外装で洋一には疎ましかった。寒いぐらいで折り合うわけにはいかない。

店内はカウンターがなく、ボックス席が10席ほどの広さだった。意外と混んでいた。

いちばん奥に座っている女に、洋一は不意を突かれた。

懐かしさが込み上げてきた。

女は、1人で雑誌を読んでいる。

顔を伏せているが、洋一には確信があった。胸が高鳴った。

洋一が近づいていくうちに、女は顔を上げた。

目元がかすかに笑った。

むかしから大仰なところのない女だったと洋一は改めて思い出す。

「津野、あきよ、やろ」

女は、頷いた。笑みが口辺にまで広がった。

「座って」

雑誌を閉じて脇に置き、あきよは言った。白いブラウスに淡いグリーンのベスト、スカート。京三銀行の制服だ。

洋一は、コーヒーを注文した。

あきよは、笑みを浮かべたまま、なにも言わず、洋一を見ている。テーブルに身を乗り出すでもなく、椅子の背にもたれるでもない。キャッツ、久し振リイ、元氣イ、と弾んで迎えられれば、洋一も軽く合わせることができたかもしれない。

あきよは、静かだ。

洋一は、なにか喋らなければと焦っていた。しかし、当たり前のは、言いたくない。まともにあきよの顔を見ていられなかった。

煙草を吸い、あきよの背後に貼ってあるアイスコーヒーのポスターを見続けた。黒い水着の髪の長い女。

「帰ってきてたん、聞いてたわ」

あきよの顔を見た。

「お父さん、亡くなったんやってね」

洋一の鼻が急に詰まった。涙が滲んだ。

不意打ちだった。

父親の死が、こんなところにも待ち受けていた。そして、初めて父親の死を甘美なものと感じている。あきよの手にかかったせいかな。

洋一には、不思議なことだった。

「かんにんね。よけいなこと言^うて」

「いや、ええんや。そおゆうことやないんや」

父親の死が、洋一の中で勝手に暴れ回る生き物ではなく、東京で手ひどく女にふられたような、そんな安全な記憶になりつつある。